

満洲・牡丹江の居留日本人の終戦時の避難

大野正夫

満洲の戦い

満洲のソ連軍との戦いは、第二次大戦の戦記のなかで、あまり知られていない。ソ連軍の行動は 3 日間の戦闘で満洲全土を掌握し、日本人兵士達をシベリアへと抑留したと語られていることがだけである。新京や奉天での開拓団家族や日本人家族の悲劇は多く記述されているが、満洲東部のソ連の国境に近い中核都市の牡丹江市の終戦前後の居留日本人の動向は、あまり記述がない。東部満洲の奥地からの開拓団家族の多くは、新京に向かって避難していったと言われている。

満洲ではソ連軍の侵攻作戦のなかでも、牡丹江市の戦いは、両方とも激しい死闘を行い、3 日間、8 月 15 日まで続いた。ソ連邦元帥 マリノフイキー著、石黒寛訳の「関東軍壊滅す」のなかで、終戦が遅かったら、さらに多大の損失をしたであろう。特に戦車の損失が多かったと書かれている。

8 月 9 日未明に満洲東部国境から侵攻したソ連軍戦車隊は、空爆を行いつつ、牡丹江市を目指していた。日本軍は、国境に近い魔刀石の丘を越えて来る戦車に爆雷を抱えて飛び込む特攻作戦を始めた。この戦いで日本軍には大砲や戦車は、ほとんどなかった。ダイナマイトを 20 本ほど束ねて爆雷線と結び、それにマッチで火をつけて 3 分ほどで、爆発する「爆雷」兵器をザックに入れて背負い、タコツボと呼んだ穴に潜んで戦車を待った。

突撃の時は、「爆雷」を抱えて戦車に飛び込む。魔刀石から牡丹江までの特攻での戦死者は、沖縄戦の特攻作戦の戦死者よりはるかに多い。ソ連軍は、動く地雷と呼んだ。

日本側の報告では、牡丹江までの戦死者 9,391 名、負傷者を含めて 25,000 名であり、ソ連軍兵士の死傷者は 7,000~10,000 名とされている。ソ連軍の報告書では、日本軍の損害は、この 3 倍くらいとなっている。また、満洲へ侵攻したソ連軍の戦死者の半数は、魔刀石から 3 日間の牡丹江作戦で戦死したと言われている。戦車隊には、「動く地雷と言われ」、多くの戦車を失っている。8 月 15 日の終戦は、ソ連軍牡丹江方面部隊には幸いであった。一方生き残った日本軍兵士はみじめであった。皆、シベリアへ送られた。

関東軍の戦略は、主力部隊を牡丹江より朝鮮へと南の通化に置き、前線の牡丹江市を要塞化して、ソ連軍の勢力を食い止める作戦であった。

日本居留民の避難

この作戦のために、牡丹江市内と周辺の居留日本人 6 万人は、ソ連軍侵攻直前に、南へ朝鮮へと避難させる作戦を取った。日本軍の牡丹江市街戦では、甚大な兵士の被害を出したが、居留



日本人の避難は順調に行われた。避難が、どのように行なわれたかと思っていたところ、国際協力機構 (JICA) の事業でお世話になっていた大樫哲生氏から、「ウクライナでのソ連侵攻のニュースを視聴すると、牡丹江からの避難のことを思いだす」と、最近に手紙が届いた。彼は埼玉県川越市に住まわれているので、聞き取り調査に大樫さんのご自宅に伺った。

川越駅で、大樫哲生 (右端) ご夫妻

大樫哲生さんは、1936年12月12日に、鹿児島県伊佐郡大口町お生まれになり86歳となっていた。1966年にJICA青年海外協力隊の初代隊員(柔道・体育)としてカンボジアに赴任した。帰国後も海外技術協力事業団の専門家としてマダガスカルに赴任し、以後JICA職員として定年退職まで在籍した。

その後もJICAシニアボランティアとして柔道指導者として、インドネシアやバングラデシュに赴任し2006年まで国際協力に関わった。彼のこのように国際協力事業に関わる人生を送ったことは、少年時代を多民族国家の満洲ですごしたことが影響しているように思われた。

父の大樫利夫氏は、軍属として牡丹江市に駐屯する陸軍(関東軍)に入省した。どのような任務かわからないが、帰国後山野町の財務課長をしたので、経理分野ではなかったかと思う。

大樫哲生氏は昭和16年、5歳の時に、家族とともに九州から釜山に渡り、朝鮮半島を経由して、満洲(現中国東北部)の牡丹江市に着き、関東軍官舎に住んだ。官舎は、寒冷な地であるが石炭を使ったペチカで、室内は暖かく快適であった。真冬は零下20度以上にも冷え込むが、寒さを感じなかった。学校では校庭に水を撒き、一面がスケート場となった。生徒は毎朝、スケートを楽しんだ。

一方、夏季は短期間であるが、結構、日差しが強く、周辺の広大な畑には、美味しいスイカ、ウリ(甜瓜)などを、満人(中国人)が栽培していて、よく食べた。

当時の小学校の教育は、軍国主義教育で、軍部の影響力が強く、学校で習った歌で、覚えている歌詞は、「王土楽土に生まれてきて、我らは世紀の朝の子だ、燃える希望に輝いて、世紀の道をまっしぐら、足並み高く堂々と進む我らは、日本男児——」である。この歌は、いまだに歌える。



1945年、小学校3年生の春頃から、日本軍の戦況が悪いことが、牡丹江市の上空に米軍機B29が、飛来してきて爆弾を投下して行くことで分かってきた。ソ連機が飛来してきた8月11日か12日に、父が官舎にいる皆を集めて、「軍部から避難命令があり、急遽、皆さんは避難する」と伝達した。陸軍のトラック、10数台に邦人家族が分乗した。

軍服姿の父とともに(左より3人目、哲生)

途中で車両が故障して停まったり、いろいろなトラブルが発生した。ソ連軍のトラックが止まり、ソ連兵が軍服を着ている父を見つけて、連れてゆかれた。その時は、何もわからず大きなショックであった。避難トラック隊はそのまま走り、朝鮮(現韓国)の釜山に到着した。そこで、終戦を知った。8月15日である。

釜山の港から引揚船に乗るのに数日間、滞在したように思うが、父が軍服姿で日本刀を持った姿で、突然現れた。ソ連兵は、軍服姿の父を軍人と思い連れ去ったが、尋問で軍人でないことがわかり釈放された。運よく、父と一緒に船で帰国できた。家族そろって帰国出来たのが、うれしかった。

九州の門司港に着くと大勢の引揚者で混雑しており、帰りの列車は鈴なりの状態であった。

牡丹江から釜山まで、奇跡と思うことがいくつか、思い出されるが、やっと父の郷里の山野にたどり着き、父の実家の長野家に滞在することになった。

帰国してすぐに山野小学校に編入したが、満洲での生活環境とは一変した。まず言葉がわからず戸惑いの連続であった。やがて徐々に慣れて親しく近所の同級生とも遊ぶかたわら、末っ子が、まだ赤ん坊の頃で、学校から帰ると背負って子守をよくさせられた。1年余り経ってから、尾の上に引っ越すことになり、小学校の高学年から中学生まで、両親とともに、農作業をし、遊ぶ暇もなくよく働いた。おかげで、体力だけは一番鍛えたこともあり、学校の相撲大会や部落の祭り(十五夜)相撲大会などでは、常に参加して上位入賞した。戦後の生活の困難な時代に必死になって育ててくれた亡き両親には深く感謝したい。

父は、市制で変わった市役所の助役から市長選に出馬して当選し、大口市の市長を4期16年間勤めた。在職中に、都市計画、ほ場の整備事業(稲作・畑を機械化のため区画整備)を精力的に押し進めて評価された。教育施設や文化施設の充実にも努力し、勲4等瑞宝章、県民表彰、大口市名誉市民の称号を授与し、85歳で逝去した。これらの多くの事業の下地は、5年間の牡丹江での経験から出来たものと思う。

牡丹江の戦後

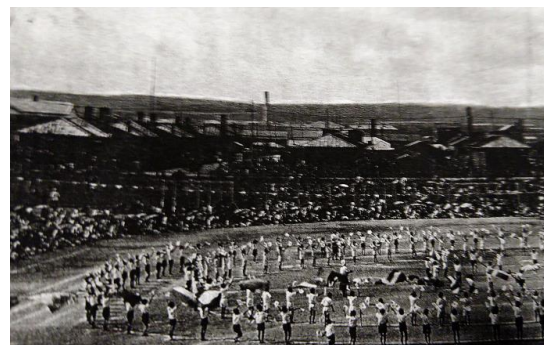
大樫さんは、76年も前の古い記憶をたどって語って下さった。この聞き取りから、空白である牡丹江市に在住の日本人、6万人の避難行動の一端が見えてきた。わずか3日間の間に6万人という大量の移動が出来たのは、かなり以前から、牡丹江市を要塞化する案があり、そのために一般住民の避難計画が立てられていたのかもしれない。その陣頭指揮が、軍人ではなく軍属スタッフや民間人が関わったことは興味深い。軍人の指揮で避難をしていたら、ソ連軍の攻撃的になったであろう。避難民として、ソ連軍が対応したので、この大移動が成功したように思う。

もし、6万人の日本人が牡丹江市に居て、激闘の3日間にいたら、民間人の多くが犠牲になったであろう。また終戦後にも、多くの日本人が牡丹江に在住していたら、新京や奉天のような悲惨なことが生じたであろう。

東部満洲の中核都市、牡丹江市の戦後の状況が書かれていないことは、多くの日本人住民が避難し終えており、激しい戦闘をした兵士達で生き残って元気な者は、シベリアに抑留されたことによると思い始めている。



大樫哲生氏の入学式後の記念撮影



小学校の運動会

(牡丹江市街地と後の満洲の大地がわかる)

(おおの まさお 82歳、高知大学名誉教授、1945年11月29日に錦州市に生まれ、戦後1年間、奉天で過ごして葫蘆島より引揚げた)